

保育者養成校におけることばとからだの指導について

The Guidance of Language and Body Education in a Childcare Training School

照屋 洋

TERUYA, Hiroshi

キーワード：保育者、コミュニケーション、ことば、身体（からだ）、表現

1. はじめに

本学では、幼稚園教諭免許状取得のための教科に関する科目として、「国語」を設定している。授業概要を見ると、「児童文学作品を取り上げ、自己の視野を広げるとともに、保育の現場に必要な国語力として、特に書く力を重視し、……」とある。実際に現場に立てば、保護者への連絡帳の記入や園だより、手紙文を作ること、また、保育所の「保育要録」や幼稚園の「指導要録」の作成など、書く力がなければ困る場面にたくさん出会うことになるだろう。

しかし、いくら「机上の仕事」に長けていても、「コミュニケーション能力」「他者を尊重する心」等など、基本的な「人との向き合い方」が未熟であれば、保育者としてやっていくことは難しいだろう。

広い視野で子どもたちを観察し、その変容に気づき、深く考え、愛情を持って接し、適切な援助をする、そうした力を学生たちにつけることは、保育者養成校の責務である。

では、学生たちは高校までにそうした力をどこまでつけてきているのだろうか。

私は中学校の現場に国語の教師として38年間勤務していたが、その中で一貫して提言してきたことがある。それは教科書をこなし、数値を上げることに専念する前に、「学ぶとはどういうことか」「読解するとはどういうことか」をまず深く考えさせることが必要だということである。そうしてはじめて、今勉強している各教科の学習が、前向きに世界と関われる力として身につく、本当の意味での「生きる力」になっていくと思われるからだ。

例えば、いじめをテーマにした物語を学習し、その作品の理解をはかるためにテストをした時、100点近い点数を取った生徒が、日常的にいじめをしていたらどうだろう。（これは実際に私が若い頃経験したことである。）

「読解したこと」「学んだこと」にはならないであろう。「読解する」「学ぶ」とは、その人自身の深いところに響き、「行動が変わること」である。

残念ながら今の学校教育には、この視点で授業を進めるには難しい環境が多くあり、生徒たちは「数値化」されたものだけを目標に学習する機会ばかりが増えている。実際に中学校の現場では、文章の読解といえば、ストーリーを追い、登場人物の気持ちを頭で理解し、テーマがわかる、という浅いところの理解で終わり、それが「学ぶ」ことだと考えている生徒が少なくなかった。物語の中で登場人物の気持ちが理解できても、生活の中で同様の場面に出会ったとき、その人の気持ちを理解することにつながるとは限らなかった。いくら物語の主人公が「自分と違う」他者と心豊かに関わられるよう成長したとしても、現実の自分は、自分とはかけ離れた（と思っている）他者を受け止めることは、「無理！」のままであった。

そうした「教育」を少なからず高校まで受けてきた学生たちは、さらにコミュニケーションはスマホという日常を過ごしている。他者ときちんと向き合うこと、深いところで生まれた思いを声に乗せ、相手に届かせること等、相手の体温を感じるコミュニケーションをここでもう一度体験的に学ぶことは、保育者を目指すものにとって大切な「学習」である。

本稿では、私が担当した「国語」と「保育内容指導法演習（クリエイティブドラマ）」（以下、「クリエイティブドラマ」と略記する）で学生たちがどのようなことを学び、どのように変わっていったか、彼らがリアクションペーパーに書いてきた振り返りを参考にしながら、その成果と可能性について考えていきたい。

2. 授業での取り組み

(1) 授業で目指したもの

座学である「国語」と、体を動かしながら学ぶワークショップ形式の「クリエイティブドラマ」は、アプロー

ちの仕方は違うが、どちらも保育者になった時の実践的な力をつけるという目標に変わりはない。つまり、「国語」はその教材を通して、また、「クリエイティブドラマ」はからだを使った作業を通して、保育現場での子どもたちとのかかわり方、人と向き合うとはどういうことかという考え方を学ぶことを目標に授業を組み立てていたのである。

学んで欲しい最も基本的なことは次のようなことである。

- 他者ときちんと向き合う。
- 相手を受けとめる。
- からだをひらく。
- 1人1人の感じていること、考えていることに気づく感性を磨く。
- 声を届かせる。
- ことばとことばにならないところのものを考える。
- 「表現」することの楽しさを知る。
- つながることの心地よさを学ぶ、等々。

そしてこれらの「学んだこと」が「行動」につながる「本当の学び」となり、幼児教育の場で実践的に動く力となるよう、保育者養成校での授業の指導方法を考えていくことが、私の研究の基本になっている。

(2) 「国語」の取り組み

シラバスの授業概要にあるような「国語力」をつけるべく、文章の読解や作文、言語の知識などさまざまな「国語」の内容を取り入れた。しかし、前述したようにそれらが頭の中だけで終わってしまっただけでは深く学んだことにはならない。作品から「学んだこと」をそのまま保育現場の実践に結びつく考え方につながるよう、指導の工夫をした。

ここで私が心がけたことは、「教材の工夫」ではなく、「指導の工夫」である。保育の現場で「すぐに使える」実践的な教材や、保育者としての考え方を学ぶのに直接つながる内容のものを選んだのではなく、ごく日常目に触れるような文章を扱うようにした。どんなものからでも、保育現場での実践的な力になる「考え方」を獲得してほしい、さらにはそうした考え方が、保育者としての姿勢、人としての生き方につながっていくことを学生たちに学んでほしいと思ったからである。そうした学び方が出来るようになれば、学んだことをそのまま行動に変える姿勢ができ、本当の意味での「学び」につながっていくのだと考えるからである。

実際の授業で取り組んだ内容と学生たちの考えたこと、感じたことを以下にまとめる。

(3) 「国語」の教材と学生の感想

① 工藤直子『のはらうた』、詩の創作

工藤直子の詩集『のはらうた』の中のいくつかの詩を学習した後、「何か」になって（『のはらうた』は動植物であったが、それにこだわらず題材は何でもよいこととした）そのものの立場で詩の創作を行った。「・」で始まる文章は、学生が書いてきた感想の抜粋である。

- ・何かの立場に立って詩を書く授業では、普段生活していても自分目線で物を見てしまいがちで、相手の気持ちになったり、立場を考えて想像してみたりというのはなかなか難しく出来ていないと思う。けれどいざそのものになってそこから見える景色を想像してみると、普段は気にもとめなかったことが見えてきたり、新しい世界が見えたような感じがした。将来保育の現場に立ったときも、子どもから見たら、子どもから聞いたら理解できるのかなど、子ども目線にたって考えてあげられる先生になりたいと思った。(T子)
- ・少し言い回しを変えて工夫するだけで、こどもにもわかるようなことばを作ることが出来ることを発見しました。(U子)

② 金子みすゞの詩

よく知られている「わたしと小鳥とすずと」のほかに14編の詩、金子みすゞについて書いた児童文学作家矢崎節夫の文章、そして金子みすゞの生涯をまとめたDVDを学習した。

- ・私は今まで出来事や物を一面的にとらえていたことがほとんどだったと思う。(バイト先で)言うことを聞いてくれない子の対応に困ることが多かった。でも、国語の授業を受け、少し変わることができた。金子みすゞの詩を読んで、自分が何かをした時に相手が何を思うかを考えられるようになった。例えば、私は今、とある年中年長さん向けの塾でアルバイトをしている。ここでは話を聞いてくれず何度言っても出来ない子がいた。その子の相手が大変で困っていた時、相手を思いやる詩に出会い、自分がその子のことを一方的に決めつけ、出来ないと思っていることに気づいた。その詩に出会ってから、相手を思いやる対応が出来るようになった。(K男)
- ・「痛いね」と私が言うと「大丈夫」って励ましてくれるやさしい大人にはたくさん会いました。でも、「痛いね」とこだましてくれる大人に私は会ったことがあるだろうか「こだましてしょうか」を読んで思いました。(中略)受け入れてくれる大人がこだましてくれただけ

で、こどもは、傷を1人で負わなくていいんだ、涙を1人でためなくていいんだということを心から理解する、私もそうやってこだますることから始めていきなうと思ひました。(M子)

③ 大山のぶ代「ドラえもん 言葉遣いへのいたわりを」
(2005.3.2 朝日新聞「私の視点」)

声優さんたちが、たとえ原作や台本にあつても乱暴な言葉は使わず、いい言葉だけを使つていこうと決めた話である。

- ・言葉によつてコミュニケーションも人間関係も変わつてくるのだなと感じた。(中略) 保育の現場でコミュニケーションの大切さ、言葉のすごさを幼児に教え、話すことのおもしろさに気づいてほしいなと心から思う。(I子)
- ・台本にある乱暴な言葉はその都度言い換えをし、子どもたちがマネをして使つてしまわないよう工夫があり、実際に子どもと関わる時には子どものことを考へて言葉を選び、接することが大切だと思つた。(R子)
- ・声優の人たちは、ちゃんとしたことばを使い、アフレコしてつた。これは、私が将来保育の現場で働く際にも大切になつてくる。汚い言葉を保育士が使つていたら、こどもも平気で汚い言葉を使うようになり、正しい言葉を使つていれば自然に正しい言葉が身につく。1日の中で保育士はこどもの親よりも長い時間過ごすのだから、保育士の接し方でいくらでもこどもは変わつてくる。その責任を感じながらこどもと成長していきなう。(N男)

④ 竹内敏晴『ことばが劈かれるとき』(思想の科学社1995)より、チヨコちゃんののどの話

チヨコちゃんがどのようにして「ことば」を発するようになったか、そのレッスンの様子を話した。

- ・相手に伝えたいと思へば思うほど、ことばは発することができ、コミュニケーションを取ることが出来るのだ。(中略) 子どもを預かり、育てていく上で最も必要なことは、人とのコミュニケーションである。何か問題が起きたとしても、人と積極的にコミュニケーションを取り合ひ、ひとつひとつ解決していきなう。(J子)
- ・私は言葉というものは、人の心を1番に動かすことのできる1つの道具だと思ふ。例えばチヨコちゃんは相手にどうしても届けたいという気持ちを持つたから声を出すことができたと思ふ。(中略) 自分の受け持つ子どもたちが大きくなつた時に、相手の気持ちに寄り添つた言葉の使い方ができるような教育をしていきなう

と思つた。国語の授業を通して、言葉1つ1つの重さを改めて考えることができたから、相手を気遣つた言葉を使つていきなうと思つた。(Z子)

⑤ 古谷綱武「道はいつもひらかれてる」

「道は、すべての人の前にひらかれてる。」で始まる22連の詩を読み、どの部分が響いたか、書かせた。

- ・こども教育宝仙大学で学びたいと思つた日から入学するために、夢を叶えるために頑張つた“あの時”を絶対に忘れてはいけなうということも「道はいつもひらかれてる」から学びました。(中略) 何事にもあきらめず道を切り開けるような保育士になり、そのことを子供達にも伝えられるような保育士になりたいと思ひました。(S子)

⑥ 照屋洋「幸せのバトン」(DVD¹⁾)

母に反抗的な少女が、赤ちゃんの頃、地震で倒壊した瓦礫の下敷きになつて自分を守つてくれたために失明したという母の真相を知り、親の深い愛情に気づくという劇のDVDを見た。

- ・(この劇のなかの母は)いくらこどもから暴言を言われても、感情的になつて言い返すことはなかつた。多くは語らずにしぐさや表情、話し方から愛情で返してつた。私も今後、子どもたちに暴言や嫌なことを言われても、ただ怒るのではなく、表情などを工夫して子どもたちに接していきなうと強く感じた。(M子)
- ・先生が(表面に現れてることは)氷山の一角と話してつたように、その人のことが表面では全て分らなうということがわかりました。この言葉を聞いて、最近の私の生活は少し変わったと思ひます。(N子)
- ・私もこのDVDと同じように母親に愛情をそそがれて育つてきたのだと改めて分かり、涙が出ました。これを見て、保育の現場でもたくさん子どもたちに愛情を持って接することが大切だと思つた。1人1人個性や感情がある。それをしっかりと感じとり、その子どもたち1人1人に寄り添つてあげられるような保育をしなうければいけなうと思ひました。(D子)

⑦ 新聞を読み解く

同じ日に発行された数社の朝刊を比べ、1面で扱われている記事の違いから、情報とはどういふものか、また、それを伝える人や集団で違つたものになることもありうるといふ学習をした。

- ・情報の見方、とらえ方について学んだことも、子ども

たちの情報など保育現場では大切だと思うから、自分だけの見方だけでなく、他の見方からも情報を見ていくことを現場で生かしていければ、良い保育士に近づけると思う。(G子)

⑧ 重松清「タオル」

祖父の死を受け止めきれずにいる少年が、祖父と父に繋がる自分の人生を見つめ、将来に目を向けるようになるまでの物語だが、周囲の言動に揺さぶられる少年の気持ちが丁寧に描かれている。

- ・私は国語の授業を受けて、「タオル」や金子みすゞの詩などで、毎回話の内容に自分も入ったかのように、相手の気持ちや行動、発言を改めて考えさせられた。(中略)これから子どもの成長のお手伝いをし、その子どもが自分の言葉や行動で人になっていくことを忘れず接していかなければいけないと感じた。(Y子)

⑨ コミュニケーションの練習

授業の始めに、近くの人と指示された課題で話をしたり、読んだものを伝えたりする練習をした。月1回の席替えのときは自己紹介を行った。聞くこと、共感すること、言葉以外のものも大切なコミュニケーションになっていることなどを学んだ。

- ・月初めに行っている自己紹介では、相手に興味を持ち、しっかりと耳を傾けて聞くことの大切さを学んだ。それはコミュニケーションが必要となる場面が多い保育士にとっても役に立つものだった。(R子)
- ・私は、コミュニケーションの第1歩は、相手を思うことの出来ることばであると思った。(K子)
- ・保育の現場では、まだあまり上手に言葉を使えず、自分の考えや気持ちを伝えることの出来ない子どもが多くいると思う。そのような子どもたちも、周りの子どもたちと上手くコミュニケーションが取れるようにサポートしたり、子どもが伝えたいことを一緒に考えてあげたりなど、ことばや感情を共有したりすることが大切ではないかと思った。(N子)

(4) 「国語」のまとめ

ここまで見てきたように、学生たちは文章を読解しテーマについて理解した後、具体的に自分はどう動くかというところまで思いを馳せることができた。前述したように、私は保育の現場に直接つながる教材を特別に選んだわけではない。また、私の方で、読解したテーマから保育者としてどうあるべきか、どう動くべきかにつながって話をしたわけでもない。そうしてしまうと、思考がバ

ターン化し、かえって本来の読解が出来なくなるおそれがあるからだ。

ではどのように「指導の工夫」をしたかということ、授業の流れから振り返ってみる。

- [1] 初めの10分はコミュニケーションの演習として、隣の人や近くの人とこちらの出した課題について話し合いをする。
- [2] 私からの話。主に学校現場で経験したこと、日常の中で気づいたこと、保育に関する話など題材はさまざま。15分。
- [3] 国語の基本的な知識の学習。漢字や敬語、文学史から手紙の書き方、十干十二支等の一般常識まで。15分
- [4] 物語や詩、随筆、論説文などの文章を読み、内容を理解する。40分。
- [5] リアクションペーパーの記入。今日の授業で思ったこと、考えたことを自由に書く。10分。

特に私が工夫をしたのが、[1]～[3]で保育につながる話をしておいたことである。例えば、[1]で隣同士の2人にそれぞれ違う短編を読ませ、相手にその話をする、という課題のとき、「聞き手が園児であると思って分かりやすく話す」という条件をつけた。[2]では保育の現場でもありうるような中学校での経験や日常目にする話の話をした。また、[3]では実際に現場で使うことばの知識として指導をした。こうして、「保育の現場につながる」道を作っておいての[4]の文章読解としたのである。さらに、前の時間に書かせた感想から、保育者としてどう動くかということまで書いたものを、前時の振り返りとして[2]のところで紹介したりもした。

学生たちの感想を読むと、それなりの成果があったと考えている。しかしこの段階ではまだ、頭の中でのことであり、実際の場面でどこまで動けるかという検証にはいたらない。今年度は幸いにも、この「国語」の授業と「クリエイティブドラマ」の授業の両方を持っていたので、1年生については、両方の授業を関連させた指導が出来た。「国語」でとらえてほしかったことをからだを動かすワークで実際の動きにつなげることをしたり、なぜあの時あのワークをやったかということ「国語」の時間に話すこともできた。(3年生は国語の授業がないので、3年の「クリエイティブドラマ」の授業は1年より話が多くなっている。)

しかし、二つの授業を担当するものがいつも同じとは限らないのだから、「国語」は「国語」の時間だけで完結したものでなければならないだろう。その指導の方法もこれからの課題のひとつとしていきたい。

最後に、半年間「国語」を受けてきての感想をいくつ

か抜粋する。

- ・国語の授業全体として、「人の気持ちを考える」ということを学んだと思う。(中略)今の自分はどうか？周りの人を幸せにすることができているか？変わらないといけなと思った。私が大学4年間でどれだけ多くのことを吸収できるかで、保育士になった時の働き方は変わってくると思った。同時にどれだけ多くの人と関われるかでコミュニケーションの幅も子どもたちとの接し方も大きく変わると思った。(A子)
- ・国語のこの授業で学んだことは、子どもたちに対する愛と、どれだけ子どもを守りたいという気持ちを育むか、ということ。(Y子)
- ・国語の授業で先生が話すこと、教材の1つ1つがこれからの自分についてとても考えさせられる内容だった。実際のところ、自分は思ったり感じたりするだけで行動には移せていない。(中略)自分の理想とする保育士はどんなだろう、それを考えて、少しずつ理想に近づいていけるような努力を惜しまない保育士になりたい。(H子)

(5)「クリエイティブドラマ」の取り組み

この授業に参加した学生は1クラス平均30名ほど(1年3クラス、3年3クラス)、からだを動かすため体育館で行った。

当初学生たちは、劇を創る授業だと思っていて、「人前で何かするのは苦手だ」と訴えてくるものも少なくなかった。

私は長い間学校現場にいたために、こどもたちに向き合う大人の「閉じたからだ」が子どもたちの自由な表現を狭めている場面をしばしば見てきた。「閉じたからだ」では、他者の感性に気づくこと、感じること、感動することもままならないばかりか、子どもたち自身も受け止めてもらえない経験を積むことで、画一的な表現を正しいと思いつまむ学びをしてしまいかねない。そして、表現にも「正解・不正解」があるように思い、自分に自信が持てず、自由な表現をすることに抵抗を持つようになる。このことは、学校現場で問題にされる自己肯定感の低さに繋がるところがあるのだが、私はそのことはすでに幼児教育から始まっていると考えている。

学生たちには、15回の授業の中で60近い数のワークを体験してもらった。いずれも体験して初めて分かるものなので今はその詳細は省略するが、学生たちの書いたものを抜粋しながら、いくつかのワークを振り返りたいと思う。(以下、〈 〉にワークの名前、「・」のあとに学生の文章を載せることとする。)

① 「みんなちがってみんないい」ということ

〈GO→STOP→ポーズ〉〈だるまさんの1日〉〈人間彫刻〉〈人間機械〉〈1枚の写真〉等々

いろいろな課題を出して「表現」をさせると、誰一人同じ表現をするものがないことに気づく。自分で体を動かし「こんな動きは変に思われるかな」と思いつつも、やってみるとみんな違っていた。

- ・ワークを通して、人はそれぞれ違って良いということに気付いた。(K男)

保育者や学校の先生が表現活動をさせていく中で、かえって子どもたちの表現をせばめてしまうということがある。それは、「表現」とは「技術」だと思い込んでいることに起因することがしばしばである。『保育・幼児教育シリーズ 表現の指導法』の「領域『表現』とは」の中で花輪²⁾は「表現技術を習得することは大切なことに違いないが、それはあくまでも内面活動を外化するための方法であって目的ではない。」と語っているように、保育現場での表現の指導は、子どもたちの自由な発想を尊重したものでなければならない。そうした学びをしてきたはずの保育者が、実際の場面ではそれを生かしていないことが多々見受けられる。

例えば学芸会で園児が「木」や「花」になるとき、指導者がその形を決めてしまったり制限してしまったりすることがある。「みんなちがってみんないい」ということばを知っていても、それを体現する場面で「みんな同じ」にしてしまうのだ。しかし、からだを使ったワークをすると、「みんなちがってみんないい」の意味を深く理解し、どう見せるかという「技術」よりも、こども1人1人の個性や可能性を伸ばすことを第一に考えられるようになる。

- ・表現には正解がないので、自分が想像したものを身体で表すことが大切だと思いました。もし、「木を表現してください」と言われたときにただ立っている人もいるだろうし、色々なパターンが見られます。人だからこそ色々な発想があってもおもしろいし、自分の中でその形が木だと思っているので周りの人を見てこのような表し方もあるのだと学ぶことができます。このようなことは保育の現場でも子どもたちに知ってほしいです。子どもだからこそ子どもの世界があって発想が豊かだと思うので、その表現することの楽しさを知り、想像する力が身につけてほしいと思います。(M子)

② 他者を考えるということ

〈お手玉キャッチ〉〈棒のワーク〉〈人間知恵の輪〉〈背中

合わせ)等々

いずれも相手のことを考えないとうまくいかないワークである。

- ・自分のことだけでなく、他人のことも考えて行動すると、様々な事がうまくいくのではないかなと思いました。(中略)このワークをしてから私自身の変わった所は、普段から一緒にいる友達や家族の気持ちを考えて行動する事が多くなった所です。こうすると自分も相手も良い気分です。このワークをできて良かったと思います。(M子)
- ・この授業以降、以前より“人”を意識できるようになりました。(Y子)

③ 声を届かせる

〈一斉対話〉〈呼びかけのレッスン〉〈やどかりゲーム〉〈仲間集め〉等々

「本当に」相手と向き合い相手と呼ぶことを、ゲームを中心に行った。

- ・みんなが色々な人の名前を呼ぶ中で自分の声が相手に届いたり、聞こえたりした時になんだか少し感動しました。(D子)
- ・声を出して相手に声が届くこと、思いが相手に伝わること、ささいなことだけどとても幸せなことなだと思いました。(K子)

④ 視野を広げる、関心を持つ

〈密度のワーク〉〈7つのボール〉〈携帯のワーク〉〈アイコンタクトゲーム〉〈共通点と相違点〉等々

広く全体を見て初めて成り立つゲームと、つながることの心地よさを感じるワークを行った。

- ・家から駅までの徒歩20分間を携帯を使わずに歩いて、ハナミズキの咲いている家の数を数えて歩いたりしてみました。イヤホンをつけずに歩くと、もうセミが鳴いていることに気がきます。音楽や携帯がなくても20分間楽しく通学することができました。季節の変わり目に気づき、新しい発見をするのにとてもいい経験になることをこの授業を通して知りました。今年のセミに気づいたのは私が一番早かったと思います。(G子)
- ・「意識をする」という事が外を歩いていて色々な発見につながっていた。いつもは何げなく通っている通学路でも朝と帰りで物の位置が変わっていたり、地面を見たらミミズがたくさんいたり、普段なら気付かないような事に気づけるようになったのは、「意識して周りを見る」という事をしたからだと思う。これが私が変化

した所です。(M子)

- ・「全体の密度を同じにする意識で歩く」「目をつぶった相手に声を届かせる」というワークを行った時に、今、自分はどこらへんにいるのか、誰がどこにいるか、相手との距離はどのくらいか、自分の存在をどう相手に伝えるか、声、音だけで誰なのか、などを考えました。このことを保育実習のことを思い出しながら、現場では、どのようにしてこれらのことをしているか、考えました。園庭で遊ぶ時には、自分の位置、他の保育者との距離、誰がどこでなんの遊びをしているか知るためには、このワークで学んだこと、体験したこと考えたことが、とても生かせるなと思いました。(S子)
- ・みんなで同じ体験をすることで共感することができ、他の話にもつながったりして、話をするのが楽しくなり、いろいろな友達と話したいと思えました。また、以前よりも人前で発表することが少しできるようになったと思います。相手を思う気持ちは自分を変える1つの方法であると思います。(N子)

⑤ 自由なからだの獲得 → 「表現」へ

〈ミラーリング〉〈創作ダンス〉〈だるまさんの1日〉〈人間彫刻〉〈シールの魔法〉〈大の字〉〈1枚の写真〉〈遠足〉〈ナイフとフォーク〉等々

人とかかわりの中で、普段とは違う動き、普段はやらないような動きが自然に出来るようなワークを行った。

- ・人は表現する力を「身体」で持っていることに気がきました。また、ペアの人の表現に合わせて、自分も表現するというコミュニケーションも楽しく、一つの作品が出来たときは、自分が思っていた完成作品とは違っても、何か通じ合えた気になりました。保育現場では、まだまだ言葉を使って表現することが苦手な子どもが多くいます。なので、まず「身体」を使って表現することを伝えたいです。(H男)
- ・私は自分自身「ナイフとフォーク」や創作ダンスを通して、表現することの楽しさを学んできました。言葉では表現することが難しいものも、身体を使えば相手に伝わるということも知ることができました。ルールのある遊びを保育で取り入れる時に、ルールで固めた遊びをすることが全てではないと私はワークを通して感じました。(R子)
- ・子どもが自由にできるようになるために、まずは保育者となる私達が恥じずに思いっきり体を動かせるようになる事が大切で、それが出来るようになった授業でした。(T子)

⑥ 自身の変化

以下は、自分自身の変化について書いたものである。

- ・4人組で1人ずつポーズをとって1人ずつ加わり、場面を作っていく、というワークを行った時、私に加わった時のまわりの声が意外にも明るく、「面白い」という声が挙がった。その時、今まで自然に隠してきた自分の内側にある性格も表に出せたような気がした。そして、一気に心が晴れたような気分になった。ほんの一瞬の出来事だったが、その後友人と関わる時も気疲れしなくなり、ありのままの自分を出せるようになった。ほんの少しの出来事で、自分が変われるということを実感して学びを感じることができたと思う。(C子)
- ・色々なワークをやってきたけれど、自分は最初の授業の時は何かを発表するのとはははずかしいと思っていたが、ワークをかさねていく内にそのはずかしさはどこかへいってしまっていて、視野が広がって、周りが見えるようになり、相手の気持ちになって物事を考えるようになったのではないかと思った。(K男)

⑦ 全体を通して

最後に、全体を通しての感想で特に印象に残ったもの、心を動かされたものを抜粋する。

- ・人とのつながりの中で人を思いやる気持ちを1人1人がもつことの意味を、自分達が実際に身体を動かしながら学ぶことができました。(L子)
- ・小さい頃は、自分も思い思いに表現していて、周りより自分が思う事をやっていたが、いつしか、周りに合わせていたり、これはこういう物と決めつけていたなと思いました。それは、表現といえるのだろうか。子どもたちに、思い思いに表現して欲しいという思いがあるなかで、どのようにして環境をつくり、どのような言葉がけをしていけばよいかを考えました。1人ひとりの子どもの気持ちをくみとりながら、保育をしていくことが本当に大切だと考えました。(S子)
- ・何かを表現するときには大切なのは上手に見せることではなく、自信を持って楽しく行うことなのかなと授業を通して思いました。これは将来出会うであろう子ども達にぜひ伝えていきたいことです。子ども達は常に何かを通して自分を表現しています。けれど私が将来進む道として今行きたい気持ちが強くなっている児童養護施設には、愛されるはずの親から暴力を受け、自分を表現することを極端に抑えている子ども達が沢山います。自分を表現して否定されるのを恐がり、あるいは自分という存在さえ肯定的に捉えられていない子

もいます。そういう子たちに、表現をすることの楽しさであったり、私は決してあなたがどんなことをしても受け止めるよということを伝えたい。そのためには、私が私を表現しないとはいけません。私から心を開き表現することで、初めて相手も少しずつ心を開いてくれると思います。(H子)

(6)「クリエイティブドラマ」のまとめ

(5)では目的ごとに項目を立ててまとめたが、実際にはその時間ごとにいろいろなワークを組み合わせで行った。その時間に学んで欲しいことを1つに絞ってワークをしたのではなく、いろいろな目的のものを少しずつ行い、日を追うごとにより深まるように組み立てていった。そのため、その場に立ち会っている私からは、学生たちの変化がよくわかり、感想に書かれたもの以上に深く学んでいると感じている。初めはみんなの前で何かすることにとっても抵抗があったが、途中からはそれがむしろ楽しくなってきたという声をたくさん聞いた。また、彼らの動きの幅、声の大きさ、表情の豊かさ、他者へのやさしいまなざし等、回を追うごとに変化し成長する姿はとて素敵なものであった。

このように、からだそのものに表れる学び方が出来るのはなぜなのだろう。

それは、そこには座学にはない「からだ」そのものに視点を置いた活動があるからだ。そして、その視点を持つことは保育者にとってとても大切なことだ。

言葉では「あなたのことが好きだ」と言っている、からだは「きらい」と表現しているかもしれない。からだは「あなたに寄りそってほしい」と信号を送っている、言葉では「来ないで」と言ってしまうかもしれない。保育者を目指す学生たちには、からだの語る言葉に敏感になってほしいと思う。

クリエイティブドラマの授業では、こうした「からだまるごと」考える感性を磨き、開いたからだの自由な表現を学び、「行動できるからだ」の獲得を目指してきた。そのためのワークをたくさん提供してきた。

しかし、学生たち自身にそうしたワークを組み立てる力、その場に応じたワークを作り出す力をつけるにはいたらなかった。たった15回の授業の中でそこまでの学びをどう作るか、今後の私の課題である。

また、本来なら、もっと明らかに変化がわかる形で「研究」を進めていくべきなのかもしれない。例えば、このワークをやったあとと免疫力が上がった、血圧が安定したというふうには、結果を数字で表すことが出来れば研究の成果はわかりやすい。しかし、「表現」の分野で「数値化」はなかなかない。

ただ、振り返ってみると、自由記述にしてきたリアク

ションペーパーも、質問に選択肢で回答する形のものを入れておけば、集計した数字が、ある部分では変化や成果を見る事の出来る資料になったかもしれないと思う。アンケートなどで「数値化」することも今後の課題としていきたい。

3. 終わりに

【学ぶ、読解する(例えば、いじめはいけない、というテーマを理解する) → 行動は変わらない(いじめをやめない)】

ではなく、

【学ぶ、読解する→行動が変わる、生き方が変わる】
とするためにはどうすればよいか、というのが私の授業を考える出発点であった。

長く勤めた教育現場では、研修会や研究授業後の研究協議会で話題にされるのが授業の進め方等の指導方法ばかりで、それを生活の中でどう行動に移すか、行動に移す力をどうつけるかという視点で議論されることはあまりなかった。

私は特に子どもたちに向き合う大人たち(保育者、教育者、さまざまな指導者等々)には、その視点を持って現場に立ってほしいと思う。そうでなければ、子どもたちの学びはただ指導者から「知識」として教え込まれるばかりで、「行動する力」「生きる力」にならないまま終わってしまうことになりかねない。

学んだことが「行動する力」「生きる力」になるためには、保育者がどういう視点を持ち、どんなからだで子どもたちと向き合い、どんなことばで働きかけるかが重要である。保育現場の子どもたちは、目の前の保育者を見て学び育っていく。保育者自身が開かれたからだで相手に言葉を届かせたとき、子どもたちもこころとからだを開き、深く学ぶことが出来るのだ。そして自由な表現が出来るようになり、違う表現の他者を認めるようになっていく。

はじめに書いたように、「要録」や園だよりなどを書く力として言葉の知識は必要なものだが、保育者として最も大切なことは、子どもたちときちんと向き合うことができるということである。授業では、「コミュニケーション能力」を高め、「他者を尊重する心」「人と向き合うからだ」「行動できるからだ」を育むために、「国語」と「クリエイティブドラマ」という二つの方向からのアプローチを考えてきた。換言すると、「知識としての言葉」ではなく、「コミュニケーションのひとつのツール(他者への働きかけという意味での)」として「ことば」を考えると、「相手を受け止め相手に働きかけるからだ」「行動するからだ」を育むことを二つの授業で試みてきた。

その目的を考えていくと、「国語」は「ことばとコミュニケーション」という部分に特化したもの、また、「クリエイティブドラマ」は「身体と表現」という視点で進める科目として考えていったほうが、より深めていけるのではないかと思う。

そして授業をさらに工夫して、「私は決してあなたがどんなことをしても受け止めるよということ伝えたい」という最後に引用したH子のような思いを持った学生たちを、私は全力で応援したいと思う。

《注》

- 1) 平成25年8月4日 日本演劇教育連盟主催 第62回全国演劇教育研究集会の記念上演として、調布市立第六中学校演劇部が上演した舞台のプライベートDVDである。
- 2) 花輪充「領域『表現』とは」(田澤里喜編『保育・幼児教育シリーズ 表現の指導法』玉川大学出版部 2014, p. 11)